

古代大和への道【4】 紀ノ川水系【2】

15. 古代「紀路」 紀ノ川の流れに沿って大和へ Country Walk 2007.7.31.



1. 初期大和王権の重要路 紀ノ川水系 と 其処を本拠とする紀氏・葛城氏
2. 紀ノ川の流れに沿って 大和へ Country Walk
 - 2.1. 紀ノ川の入口を押さえ、大陸・朝鮮半島の窓口となった紀氏
 - 2.2. 紀ノ川の中流 古代大和の玄関口 五条
 - 2.3. 五条から陸路 金剛山の東麓 風の森峠を越えて 大和・葛城へ
3. まとめ 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました



紀氏の古墳群といわれる
風土記の丘 岩橋千塚古墳群



紀伊一宮 日前宮
紀氏が代々祭祀を司る



五条市をゆったり流れる紀ノ川
ここより東へ90度方向を変え、吉野へ



金剛山東山麓 大和と紀ノ川・五条の境 風の森峠とこの地を本拠とする鴨族の高鴨神社



7月30日早朝 再度 紀ノ川へ

前回は龍門山に登り、龍門山の頂上部にある磁石石を見ると共に和歌山から吉野・大和へと悠然と流れる紀ノ川の流れを見てきました。吉野・大和から和歌山へ 龍門山の麓を悠然と流れる大河 紀ノ川。間違いなくこの川が古代の重要な交通路だったと思いました。今回は4・5世紀 この紀ノ川の河口を根拠地に初期大和王権の中核として 朝鮮半島諸国との交流・鉄をはじめとした文物の移入に大きな果たした紀氏の足跡を訪ね、古代日本の成立に果たした紀ノ川の役割を考えたい。

また、紀ノ川を和歌山から遡り、大和への上陸地となった五条 そして五条から陸路大和・葛城へ至る「紀路」のルート「風の森峠」にまでたどって、本当にこの道がこの時代の最重要交易品「鉄」や文物の通商路として 役割を果たせるかどうかを確かめたい。紀氏の古墳群 岩橋古墳群のある風土記の丘の丘陵地に登れば 紀ノ川の河口にある和歌山製鉄所を和歌山平野越しにゆっくりと眺められるだろう。

また、大和と紀ノ川の分水嶺 金剛山の東山麓は地形的にもおもしろい場所でもありました。

今年の春まで和歌山線の北宇智駅にはスイッチバックがあり、

スイッチバックがあるということは地形的に厳しくて汽車が一気に坂を登れないところなのか???

そうだとしたら この古代の陸路はきびしかったのではないのか???

これも 興味津々。 欲張ったスケジュールですが、一度出かけているので何とかなるだろうと。

淀川や大和川は近くて親しみがありましたが、紀ノ川は遠くて 未知の世界。

こんなに大和に近く、また 大和と密接な関係が大和王権初期にあったとは知りませんでした。

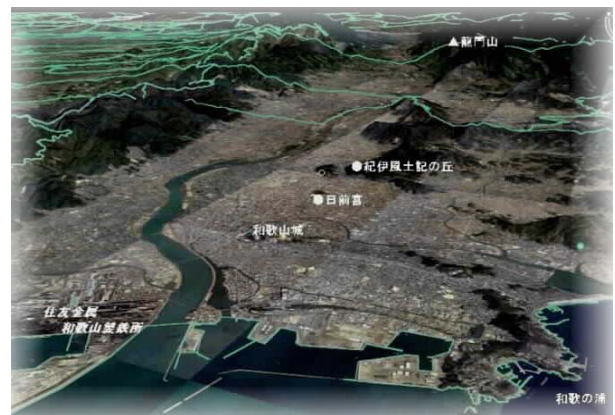
【参考】

古代大和への鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

古代大和への鉄の道を訪ねて【2】 大和川「亀の瀬・龍田越」 Country Walk

古代大和への鉄の道を訪ねて【3】 紀ノ川水系【1】 紀ノ川のランドマーク紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk

1. 初期大和王権の重要路 紀ノ川水系 と 其処を本拠とする紀氏・葛城氏



和歌山紀ノ川の河口から紀ノ川沿いを遡って 大和へ入る道は「紀路」と呼ばれ、すでに縄文時代から、多くの人がこの川を遡っており、3 来期後半卑弥呼の古墳時代に始まり、大和が日本の中心として 三輪山山麓に本拠が築かれた初期大和王権の時代の5世紀から6世紀には大和王権と瀬戸内・西日本そして大陸を結ぶ最重要道であった。

特に「鉄」の輸入とその輸入路の支配が日本統一の源泉だった大和王権にとっては生命線で、数多くの渡来人や文物がこの道を通って大和に入り、大和王権を支えた。5世紀の後半 難波津の港が整備されると最重要路は大和川水系に移っていったと思われるが、それまでは一番重要な道だったろう。

この初期大和政権の時代に紀ノ川河口に本拠地を持ち、優れた航海術と交易により 大陸・朝鮮半島諸国との交流網をつくり、大和王権の外交・軍事の一翼として活躍したのが、紀ノ川の河口を押さえる紀氏であり、葛城に本拠を構える葛城氏であった。 葛城氏は竹内宿禰を祖とする紀氏と同族の豪族で、天皇家の外戚・大臣として権勢を誇ったといわれる。

古代の紀ノ川の河口は現在と違って新和歌浦あたりで、紀伊水門と称され、大和王権が直接管理する外港としてきわめて重要な機能を果たしたといい、その痕跡として 河口から少し入った紀ノ川北岸の鳴滝には、5世紀中頃の大和朝廷の管理する大倉庫群 鳴滝倉庫群の遺構が見つかった。5世紀後半に難波津に大倉庫群が建てられる前には この地が大和王権の重要な外港であった。

この時代 中国南朝の諸国家や朝鮮半島の百済・新羅・伽耶諸国との交渉に際し、大和王権の使節や水軍は紀伊水門から出航し、また紀伊水門に運ばれた異国の文物や渡来した人々は、紀路を通して大和に入っていた。その後、5世紀後半に難波津の港が開かれると、大和王権の外港は次第に難波津に移り、7世紀になると飛鳥朝廷の外港は難波津に限定されていったという。



紀ノ川（奈良県を流れている区間は吉野川と称されています）は、落差が少なく、途中に滝がなく、古代にはもっと水量

があり、紀ノ川河口から奈良県五条　そして　山間を通り抜けて下市町千石橋まで船で遡ることが出来たといわれる。大和へ入る「紀路」は　五条で舟を降り、東の吉野へ分け入る紀ノ川(吉野川)を離れ、陸路で金剛山東麓を北の分水嶺を越えれば、大和・葛城　現在の御所市である。

この紀ノ川水系から大和への分水嶺の峠が「風の森峠」で、4 世紀　天皇家の外戚・大臣として権勢を伸ばした鴨族の本拠地「鴨神」で、さらにその北側　金剛山東山麓から葛城山麓が「葛城」で葛紀氏の本拠地である。

この初期大和王権の最大の交易品は朝鮮半島諸国から移入される「鉄素材」だった。

まだ　日本で製鉄が始まらぬ時代であり、朝鮮半島からの鉄の輸入独占支配が大和王権を支えた西日本豪族連合の絆であったといわれる。したがって　数々の渡来人とともに鉄素材がこの紀ノ川沿いの道を通して、大和に入ったに違いない。

「紀路」は大陸・朝鮮半島から瀬戸内海そして大和を結ぶ　初期大和王権の「鉄の道」の最初のルート上にあったと思われる。そんな中で　航海術・朝鮮半島との交流網を築いていた葛城氏を含めた紀氏一族の役割は重要で、5・6 世紀のそんな朝鮮半島での紀氏一族の業績が「記紀」に記されている。そして、7 世紀　律令・中央集権の国家体制が整ってゆき、藤原氏の台頭などとともに初期大和王権を支えた「氏」集団は滅亡したり、急速にその権勢が衰えてゆく。

紀ノ川下流の南側、JR 和歌山駅東方約 2km の丘陵地(標高 20～150m)を中心に分布する岩橋千塚古墳群は、現在紀伊風土記の丘として、整備されているが、5 世紀から 7 世紀前半かけて築造された前方後円墳、円墳、方墳など約 700 基が集まり、その古墳の数の多さは全国でも最大クラスである。その範囲はおおよそ 3 キロ四方に広がり、北に紀ノ川、西は日前宮を中心とした平野部に面している。



和歌山駅周辺から風土記の丘を望む 2007. 7. 31.

被葬者については確実なところは不明であるが、古墳時代以

後にこの地域で水田開発に欠くことができない用水路の設置や開発に力を注いで勢力を拡大し、初期大和王権と密接な関係をもっていた豪族　紀氏・紀国造に関連するものと考えられている。また、この丘陵地の直ぐ下の平地部にある日前宮は日本書紀にも載る日本でも一番古い神社の一つで、紀氏が代々祭祀を行ってきたといわれる。これら紀ノ川河口近くの地域からは韓式土器や鉄製品など朝鮮半島と関係を示す遺物が数多く出土し、朝鮮半島との関係の深さがわかる。



4・5 世紀頃の紀ノ川河口周辺の遺跡群 地図



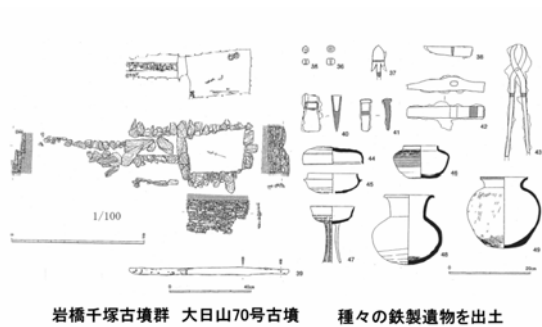
大谷古墳から出土した馬首



大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群



紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器
紀伊風土記の丘資料館展示より



5世紀から7世紀にかけて 紀ノ川の河口を本拠とした紀氏の古墳群といわれる岩橋千塚古墳群
 朝鮮半島との交流を示す鉄製品や韓式土器など数々の遺物が副葬されていた
 紀伊風土記の丘資料館展示より

○ 紀氏を中心とした古代日本の歴史 概要

4世紀			紀氏、泉南、紀の川河口へ入る
391	高句麗広開土王碑	岩橋千塚古墳築かれ始める？ 源流は高句麗	紀氏、紀ノ川流域に勢力をはる 紀角宿彌 朝鮮半島に攻め込む
五世紀	宮井川できる？ 紀氏が 紀ノ川下流干拓 紀ノ川河口古墳爆発的増加 大谷古墳は熊本菊池川の石	馬冑は伽耶（任那）5世紀は紀ノ川北岸が古墳は優位 巨大古墳は築かれていない	
5世紀央	鳴滝倉庫 紀ノ川下流南岸の開発が進展		紀氏 朝鮮半島と大いに関わる
5世紀後半	紀氏、倭王朝の中枢に 紀の川北岸に大きい前方後円墳 紀氏、ピークの時代に 岩橋千塚古墳築かれ始める、源流は高句麗		
5世紀末	対朝鮮半島拠点が難波に移り始める 大谷古墳（馬冑）		
6世紀初	6世紀は紀の川南岸の古墳が優位		紀氏南朝鮮との関係切れる 紀直と紀臣に分離開始
6世紀前半央	磐井の乱 継体朝の没落 継体一大伴一紀氏 欽明一蘇我		紀氏、平群斑鳩に進出 紀臣氏復活
6世紀央			
6世紀	岩橋千塚古墳終了		
562	新羅、任那伽耶を滅ぼす		紀男麻呂宿禰は大將軍
587	蘇我物部戦争		紀男麻呂、蘇我氏に味方す
645	大化改新 蘇我氏滅亡		
史実とした場合 神武東征の時期・九州東征 3世紀末～4世紀始め 邪馬台国 3世紀に成立			

紀の国は古代から昔クス・スギ等の良材の産地で、これを利用した造船技術が発達し、紀州独特の大型構造船の製造地であり、紀ノ川河口には、岩橋千塚古墳群（国内最大級の群集墳）、大谷古墳（朝鮮に関係深い馬冑・馬甲等出土）、鳴滝遺跡（紀伊水門倉庫群跡）があり、瀬戸内海から紀伊水門を門戸に紀ノ川を溯って大和に入るルートが、大和と朝鮮を結ぶ重要な幹線で、古墳時代中期は和歌浦より紀ノ川を遡り、この紀路を経由して、中国大陸や韓半島から渡来した人・物の情報が、大和へ入ってきたと推定されている。

紀氏の祖は、渡来人説（百済からの渡来）や九州から3世紀ごろこの和歌山の地に移り住んだ集団（紀直）といわれ、紀ノ川南岸平野を潤す宮井川（名草溝）を切り開き、名草平野を一挙に農耕地にしたことが紀氏の豪族としての力を確立し、紀ノ川の河口に本拠地を持ち、優れた航海術と交易により 大陸・朝鮮半島諸国との交流網を持ち、大和王権の外交・軍事を担って 大和朝廷の朝鮮出兵などに活躍した。そして、5世紀末から7世紀にかけて 在地の豪族で 紀国造として地方官となる紀直と紀角宿禰（竹内宿禰）が祖と称し大和王権内で活躍する紀臣の2大集団に分かれた。

また、和歌山の河口近くにある紀伊一宮日前宮は日本書紀にも載るにほんでも一番古い神社の一つ。 紀氏が代々祭祀を行ってきたといわれる。

紀氏が活躍した4世紀から6世紀は、大和朝廷が朝鮮半島に盛んに武力関与を行った時期で、大和王権の外港 紀ノ川の河口を重要拠点とし、大和王権の外交・軍事を担って 大和朝廷の朝鮮出兵などに活躍したのが紀氏である。

4世紀末から5世紀初め、高句麗の南下に対抗して、高句麗の広開土王の軍と戦った倭軍は、紀路から紀ノ川河口に出て、紀伊水軍によって半島に運ばれたのかもしれない。また、雄略朝を前後する4世紀から6世紀は、大和朝廷が朝鮮半島に盛んに武力関与を行った時期とされている。任那が滅びる562年には紀男麻呂宿禰が新羅を責める大將軍になっている。

583年には、紀国造押勝が国家の重要案件である任那復興に

関与を求められ、火葦北国造阿利斯登の子日羅を招いて任那復興策を検討するために、百済に遣わされている。

一方 紀ノ川を遡った奥 大和への入り口 金剛山の東山麓 葛城に本拠を構える葛城氏についても 日本書紀の記事によると「神功皇后摂政5年に新羅王の人質の見張りとして襲津彦を新羅に使わすが、対馬にて新羅王の使者に騙されて、人質に逃げられ、怒った襲津彦が踏鞴津に上陸して草羅城を攻撃して捕虜を連れ帰った。この時連れ帰った人たちが桑原（現在の南郷??）・佐摩（御所市風の森 高鴨神社のあたり）・高宮（御所市名柄）・忍海の4邑に住む人々の祖先である。」 など葛城氏の始祖といわれる葛城襲津彦など4・5世紀朝鮮半島で活躍したとの記述が残されている。



紀伊風土記の丘 遠望 2007. 7. 31.

2. 紀ノ川の流れに沿って 大和へ Country Walk 2007. 7. 31.

2.1. 紀ノ川の河口近く 紀伊風土記の丘を訪ねる

大陸・朝鮮半島の窓口となった紀氏の本拠地



7月31日晴れ 朝10時前 1週間ぶりにJR和歌山駅に降り立つ。

暑くなりそうですが、今日は古代 この紀ノ川の河口 和歌山に本拠を置いた紀氏の足跡を求めて 紀伊風土記の丘へ。資料館があるので、ほとんど情報を持っていない紀氏と「和鉄」の関係を教えてもらおう。そして、それによって、また足の向くままであるが、風土記の丘に点在する紀氏と関係深い岩橋古墳群を歩いて、山から和歌山を見下ろして、日前宮に出て、電車で紀ノ川筋を遡って 古代 大和への入口になっていた五条の港周辺へ。出来れば ここから陸路となっていた風

の森峠を越えて葛城・御所へと大和に入ろう。
大まかな計画ではあるが、一応地図など事前調査済みである。

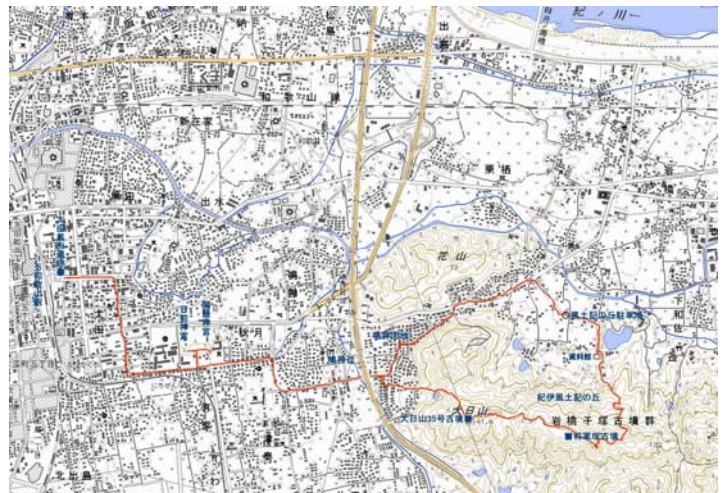
風土記の丘へはJR和歌山線で行っても 貴志川線で日前宮川から行ってもいいし、バスもあるはずとゆっくり構えて、JR和歌山の駅前へ出たのですが、満悪くどれも都合悪く、30分ほど待ってバスに乗る。

「そら 日前宮の方から歩いたら結構時間がかかってしんどいよ。先に風土記の丘まで行って 歩いたら・・・」とバスの運転手さんに教えてもらう。

JR和歌山から東へ、市街地を抜け、正面風土記の丘の丘陵地が近くなり、高速道路の陸橋をくぐり、鳴滝団地を通り抜け丘を乗り越え、紀伊風土記の丘の駐車場。和歌山から20分ほど 南側には緑に包まれた丘陵地が連なり、反対側は田園地帯が続く。鳴神には鳴神貝塚遺跡があり、縄文・古墳時代 この丘陵地の山裾あたりまでは、紀ノ川河口の湾内であったと推察される。

良く整備された公園内の道を歩くと丘陵地の一番下のところに資料館があり、その後の丘陵の頂上部を中心に張り出した幾つもの枝尾根に700を越える古墳が広がっていて、今はそれらの古墳群をめぐる遊歩道が整備され、古墳のいくつかは中が覗けるように整備されていた。

また、資料館には紀伊風土記の丘・岩崎千塚古墳群を中心にこの紀ノ川河口部を中心とした古代遺跡がパネルと出土品展示されていて、和歌山の古代の歴史がレビューされていた。



紀氏の足跡を訪ねて Walk 紀伊風土記の丘 と 資料館

この風土記の丘と紀ノ川を挟んで ちょうど反対側の北側にある大谷古墳から出土した鉄の馬冑・大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群・紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器、そして この岩崎千塚古墳群から出土した鉄製品や土器など数々の副葬品が展示され、この和歌山が4・5世紀大和王権の重要な外港として、朝鮮半島・大陸との交流の重要拠点であったことが示されていた。



大谷古墳から出土した馬冑



大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群



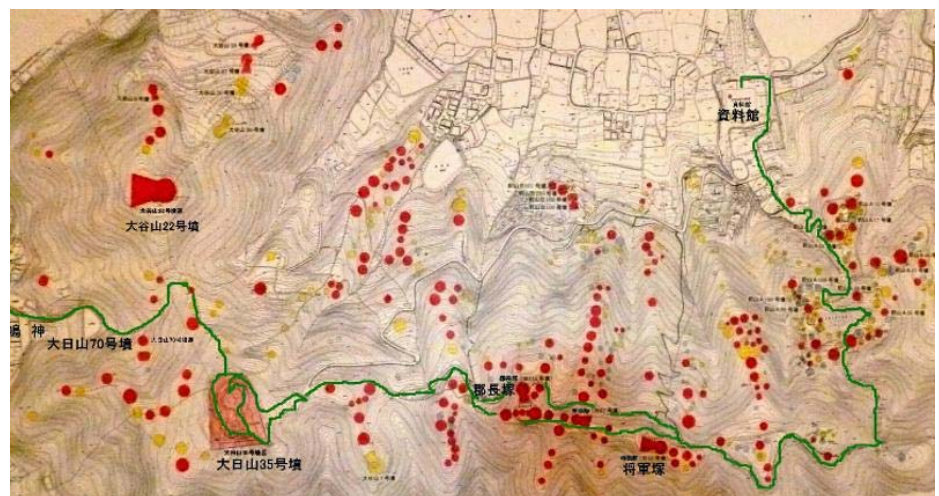
紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器



岩橋千塚古墳群から出土した鉄製品などの副葬遺物

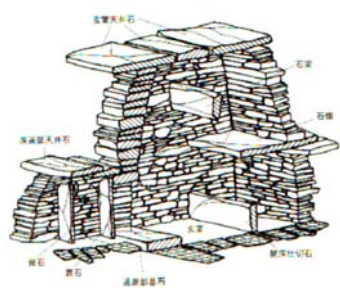
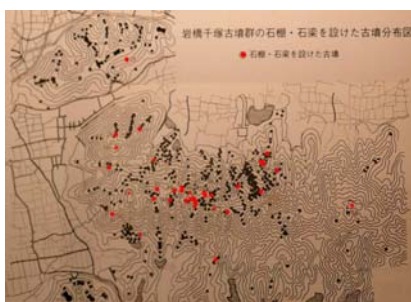
紀伊風土記の丘資料館展示より

これら岩橋千塚古墳はこの紀ノ川河口部一帯を根拠地としていた紀氏を中心とした豪族たちの5世紀から7世紀までの古墳群(大部分は6世紀)といわれており、石室の型式やその副葬品から朝鮮半島や大陸と深いつながりがあったことが伺える。



700 もの古墳が丘陵地の尾根に点在する岩橋千塚古墳群の古墳分布と歩いたコース

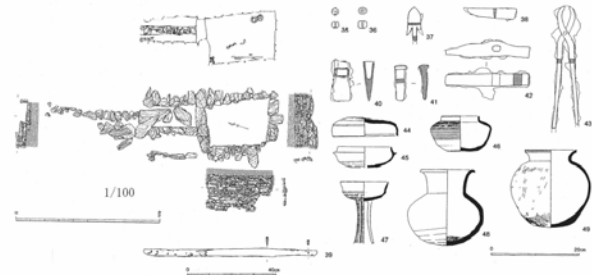
この岩橋千塚古墳群には首長の墓とかながえられる前方後円墳は29基あり、そのほかは円墳・方墳である。古い前方後円墳は花山につくられ、それから 大田に山・大日山から前山へと築造されて行ったという。また この岩橋千塚古墳群は、横穴式石室に石棚、石梁をもつ古墳が多いことで有名であり、特に石梁はこの地域にしかみられない珍しいものである。それぞれの古墳の埋葬施設は、結晶片岩の板石を積んで長方形の空間を造った竪穴式石室、横穴式石室などがあります。石室を設けず板石を立ててつくる箱式石棺や、木棺を粘土で包んだ粘土槨なども見られる。なかでも横穴式石室に見られる石棚と石梁は、岩橋千塚古墳群の最も大きな特徴です。とくに石梁は、割り石を積み上げただけの石室の壁面を崩れにくくするために支える「構造材」の機能があると考えられている。これにより 将軍塚などのように天井の高さ約4.3メートルの大きな「玄室」確保することができたと考えられます。また、床の下には排水施設があり、水が外に抜けるような構造になっています。



石梁と石棚のある岩橋型 横穴式石室模式図

前山 A46 号墳 前山 B53 号墳(将軍塚古墳)

私の一番の興味は この紀ノ川流域での「鉄」。この時代大和や河内など畿内では渡来の技術集団をかかえ、大泉・葛城・布留など鍛冶工房が営まれている。葛城氏も忍海や南郷で鍛冶工房を持っている。朝鮮半島の鉄素材の移入に大きな役割をはたしたと考えられる紀氏もこの紀ノ川沿いに鍛冶工房をもっていたのではないかと考えたのですが、残念ながら良く知りませんでした。しかし、この古橋古墳群の副葬品として数多くの鉄製品が出土しており、特に大日山 70 号古墳からは須恵器 土師器 陶質土器馬具 玉類とともに 鉄刀 鉄鏃 小刀 ヤリガンナ 鉄鉗 鉄鎚 鉄鑿 鉄斧など鉄製品・鍛冶具などが副葬されていた。



岩橋千塚古墳群 大日山70号古墳 種々の鉄製遺物出土

鍛冶具が出土した大日山 70 号古墳の副葬遺物

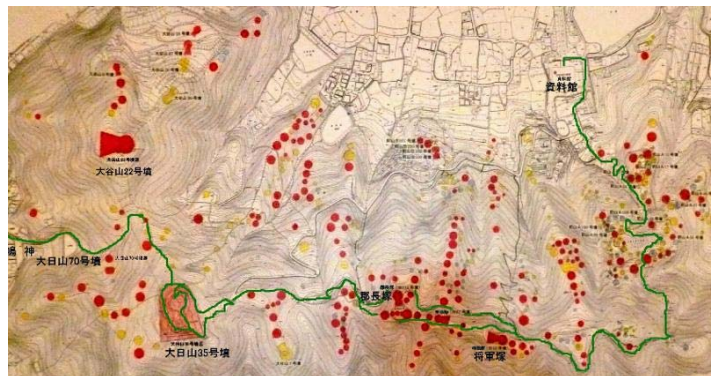
須恵器 土師器 陶質土器 鉄刀 鉄鏃 小刀 ヤリガンナ 鉄鉗 鉄鎚 鉄鑿 鉄斧 馬具 玉類

鍛冶具がこの岩橋古墳群（大日山 70 号古墳）に副葬されていたことや 多くの鍛冶加工された鉄製品の遺物が副葬されていたことなどから、紀氏もまた鍛冶工房の経営強いては日本における鉄生産の模索をしていた可能性はあると思っている。しかし、資料館の学芸員の方にお聞きしても、鉄滓の副葬もなく、紀ノ川沿いでも製鉄遺跡は見つかっていないとの事でした。また、鍛冶具が服装されていた大日山 70 号古墳の位置も教えていただいたのですが、藪の中 道がないので行けないとのこと。（大日山から鳴神へ降りる尾根道を下って、池にでる手前の藪と聞きました。 下図参照）

この風土記の丘の資料館で 紀氏と朝鮮半島とに繋がる数々の遺物や遺跡 そして 700 もの古墳群（その中に首長級の墓と思われる 29 基の前方後円墳を含む）をほぼ 6 世紀 100 年間につくった豪族の存在を知ることが出来、大和にとって、紀ノ川が極めて重要であったことを理解できました。

資料館を出て、岩橋千塚古墳をたどる。 大日山の頂上周辺へ行けば 和歌山市街地が一望できると教えていただいたので、古墳群をめぐるながら大日山頂上部にある大日山 35 号前方後円墳を目指す。

資料館のすぐ横から山へ登って、古墳群をめぐる回遊路があり、元に戻る入口に風土記の丘の案内と岩橋千塚の碑が立っている。静かな森に包まれた丘陵地の中 首長級の墓と思われる主要前方後円墳が峰の頂にあり、それをめぐれるように道が付けられ、また、数々の墓の内部が公開されており、この丘陵地の稜線のところどころで、和歌山 紀ノ川の平野部が見下ろせる。



岩橋千塚古墳群を巡って 前山・大日山から鳴神へ



岩橋千塚古墳群めぐりの登口

2007. 7. 31.

○ 前山古支群周辺

資料館の横から坂道と登り始めて すぐ左脇の枝尾根に広がるのが前山古墳群 岩橋古墳群の中では一番古い 5 世紀につくられた古墳群である。 結晶片岩を積み上げた石室の壁が美しい。私にははじめての印象。



前山 A24 号墳内部

A23 号墳のすぐ上にある径 25m の円墳。横穴式石室は玄室長 2.06m、幅 1.86m、高さ 2.5m の両袖式で、石棚はなく、石梁が 1 本架設。

前壁部が開口していて、石梁を間近に見学ができた。



前山 A13 号墳とその周辺

径 18m、高さ 3.5m の円墳で保存状態の良い横穴式石室が公開されている。玄室前道を持つ岩橋型石室で、全長 5.84m。

奥壁には石棚が設けられ、上部には石梁が二本架設されています



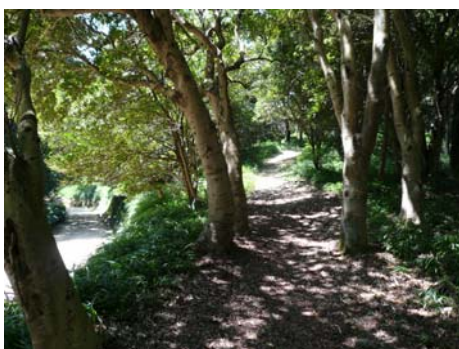
前山 A46 号墳

径 27m、高さ 8m の円墳。横穴式石室は全長 8.8m、玄室長 3.34m、幅 2.12m、高さ 3.4m の両袖式で、前山 A 支群では最大規模。石柵 1、石梁が 4 本架設され、排水溝が設けられている。



風土記の丘の下 平野部を東西に流れ下る紀ノ川 2007.7.31、
前山 A46 号墳周辺より 直ぐ下中央に資料館もみえる

○ 丘陵地の頂上部の尾根に出て 将軍塚・郡長塚古墳へ



将軍塚 前山 B53 号墳

将軍塚古墳は、海拔約 150m の岩橋前山山頂付近にある 6～7 世紀 古墳時代後期の前方後円墳（全長約 42.5m）。この古墳には、横穴式石室が前方部と後円部にそれぞれ造られている。見学できる後円部の横穴式石室は、羨道・玄室通廊部・玄室があり、玄室の床から



天井までの高さは約 4.3m。石室には一枚の板石からなる石棚と、石梁が1本あり、羨道にも1本の石梁がある。羨道は2枚の扉石で閉じられ、玄室よりも約 20cm 床が高くつくられている。玄室の床には川原石が敷き詰められ、床下には玄室に溜まった水を石室の外に排水できるように溝がめぐらされている。すでに盗掘を受けていたため、どのような副葬品が置かれていたかは不明という。



將軍塚の石室内部



將軍塚古墳 周辺



郡長塚古墳

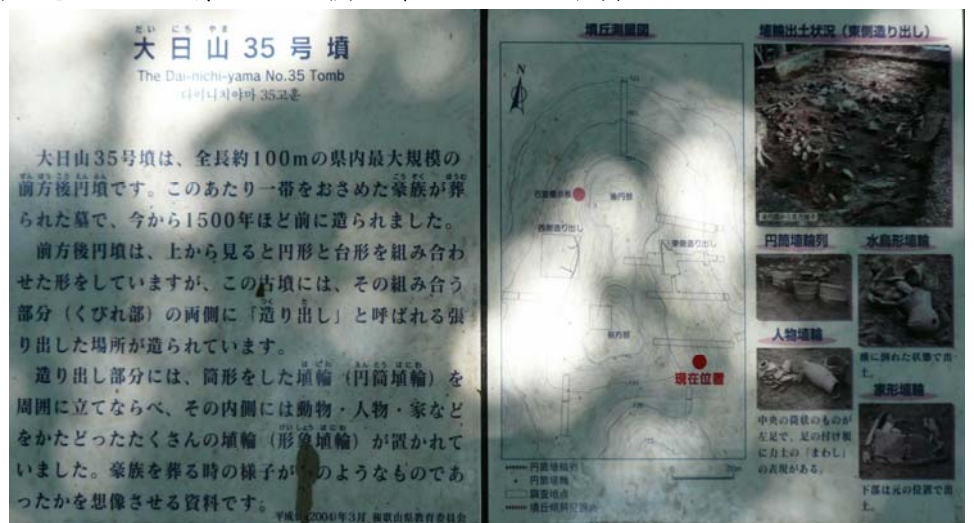
大日山回遊路

○ 大日山35号古墳



丘陵地の頂上尾根の西の端 大日山頂上部 大日山35号墳丘

首長級前方後円墳が建ち並ぶ丘陵地の頂上尾根を西に歩いてきて、郡長塚を過ぎると、道はこの丘陵地を下って元の資料館の方へ行く道とその尾根筋を東へ、大日山の頂上部大日山35号墳への道との分岐に出る。この分岐点から尾根に沿って西へ林の中を少し進むと、大日山(標高 141.8m)の頂上部である。木々の切れ目からこんもり盛り上がった丘が見える。この丘の端のところに大日山35号墳の案内板があり、ここが古墳の南側の端で



ここから北側へ 頂上付近の地形を利用して前方後円墳が作られている。随分大きな前方後円墳で 中々全体のイメージがつかめないが、この墳丘に沿って 周りを巡る道と墳丘に上がる道が整備されている。墳長が約 96m の和歌山県で最大規模の前方後円墳で、墳丘は3段築成で、2段目の東西くびれ部に造り出しが構築されている。墳丘の築造は、結晶片岩の岩盤を整形して行い、盛土は部分的な範囲にとどまっている。このように自然地形を利用して墳丘を築造しているため、後円部が前方部より低くなったと考えられている。築造時期は、石室羨道部や造り出しで出土した須恵器を総合的に検討すると、6世紀初頭と考えられ、墳丘規模から大日山35号墳が当該期の紀伊首長墳であったといえる。さらに、くびれ部で検出された造り出しでは、多様多数の形象埴輪が整然と並べられ、豪族を葬るとき、つまり、古墳時代における王権中枢や地方首長の古墳祭祀のあり方を考察する貴重な資料である。

墳丘の北の端から斜めに墳丘に登ると、木々のない草叢平地になっている。きっちりとした古墳の形が良く見えなかったが、どうも 全体がつかみにくいのは一部 自然地形をそのまま残し、墳丘があまり高くないためかもしれない。むしろ、墳丘の下を巡る道を ぐるっと1周たどる方が、前方後円墳をイメージできる。



墳丘の上から下



南の前方部 周辺



北の後円部 周辺

大日山35号墳の上 周辺

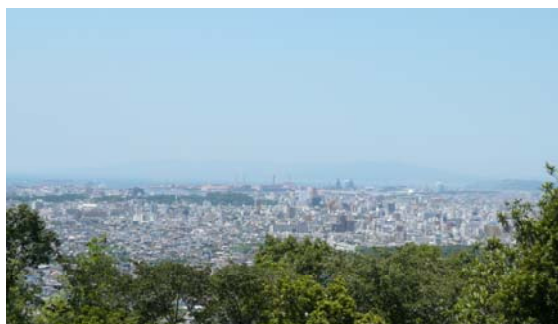
南の前方部の端には送電鉄塔があるが、この周辺からは 南西側 和歌浦から和歌山の市街地そして 紀ノ川流域と広がる 和歌山平野部が一望できた。北西側には 泉南の山裾を東から西に流れる紀ノ川が流れ下り、その向うには淡路島がかすんで見え、その河口部には和歌山製鉄所がどっしりと座っている。一度見たかった景色である。

古墳時代には もっと近くに 紀ノ川の流れがあり、和歌の浦の海がひろがっていて、この丘陵地からは 紀ノ川を遡って大和へゆく、舟の往来が眺められたに違いない。

さすが、この地を納めた豪族 紀氏の長の墓にふさわしい場所である。



和歌浦から和歌山の市街地そして 紀ノ川流域と広がる 和歌山平野

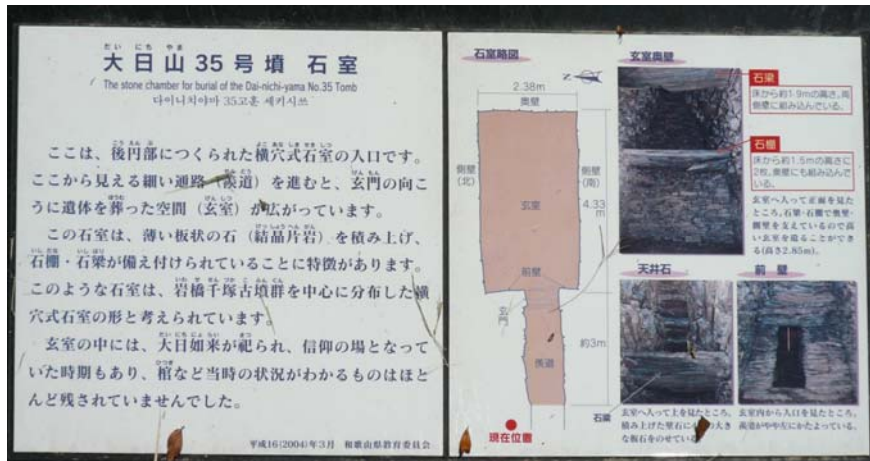


淡路島の手前 和歌山製鉄所 遠望



和歌山の市街地を東西に流れ下る紀ノ川

墳丘の下を一周巡る道を後円部を北に回りこんだところに石室の入口があり、石室の案内パネルが置かれていた。
石室の内部に大日如来が安置され、信仰の場になっていた時代もあり、棺や副葬品は良く判らないとのことである。



後円部 石室の入口周辺
墳丘を巡る道で

この大日山の西斜面の下は 現在の鳴神地区で、和歌山平和の中心であり、古墳時代紀氏の本拠地でもある。紀氏の本拠地から、正面に見上げる山の上に首長の墓が作られ、この平野側 大日山の南側斜面にも 古墳群があり、その一つ大日山70号墳から鍛冶具などが副葬されていたという。 その場所にも行きたかったのですが、この岩橋千塚古墳群の公園整備地区から外れ、道がなく、竹やぶなどブッシュの中と聞いて断念。 でも この大日山から すぐ近くを鳴神地区へそのまま下って行く道があるので、資料館への回遊路にはゆかず、そのまま鳴神へ下る。

「紀氏の情報が集められれば、また 丘陵の丘に登れば和歌山が見えるだろう」と軽い気持ちのハイキングとかんがえていましたが、 こんなに多くの古墳があり、しかも良く整備され高遠で古墳の内部がみられたのには予想外。また、薄い結晶片岩を積重ねた古墳の内部の美しさ。 いろいろ古墳を見に沸きましたが、これもあまり記憶なし。 やっぱり 知らないところ いろいろあるなあ・・・とこの丘陵地を降りてきました。



大日山から 回遊路と分かれて西へ 鳴神地区へ 山を下る 2007.8.31.



○ 紀氏が代々祭祀を司ってきた古社 紀伊一宮「日前宮」



鳴神地区に下りてくるとちょうど昼。午前中に 出来れば、紀氏の本拠地「日前宮」に行って、午後、紀ノ川の大和側の外港「五条」まで JR 和歌山線に乗って遡る予定。この鳴神から20分も歩けば「日前宮」。夏のきつい日差しの中、東へ鳴神の街を東へ抜けてゆく。まもなく、朝バスで通り抜けた時に見た日前宮の森が見え、鳥居の前に出る。

伊勢神宮と同格の由緒ある神社という。鳥居をくぐって砂利の道を北に行くと T 字路になっていて、左側に日前神宮 右にほぼ相似の社殿がそれぞれ鎮座している。



日前神宮



國懸神宮

ほぼ相似の二つの社殿が鎮座する古代紀氏の本拠地「日前宮」

紀伊国一宮「日前宮」は、出雲大社と並び日本最古の神社とされ、古代豪族・紀氏の本拠地としても非常に古い歴史をもっている。日前宮の境内には相似した二つの社殿が東西に鎮座し、西の社殿を日前神宮、東を國懸神宮といい、両神宮を総称して一般に日前宮と呼ばれる。

天香山から採取した銅を用いて天照大御神の御鏡を鑄造。その最初に鑄造された天照大御神の御鏡 前霊(さきみたま)を日前國懸両神宮の御神体として、後に鑄造された御鏡を伊勢の神宮の御神体として奉祀されたと『日本書紀』に記されている。爾来、紀氏(きいし)によって歴代奉祀され、両神宮の祭神が三種の神器に次ぐ宝鏡とされた。

また、日前宮の最初の鎮座地は毛見浜の宮であるとされ、古代海上交通の要衝から現在の稲作地帯への遷座は、紀氏の権力基盤の推移を物語る貴重な伝承である

伊勢神宮と同格の大きな地名宮なのですが、神域もさほど大きくもなく、大げさな感じもせず、古代の神社らしく、和歌山の街の中に ひっそりと静かな森が今も保たれていました。

日前宮を出るともう暑くてたまらず、神宮の直ぐ前のローソンに駆け込み、ローソンの中でバスを待って、JR 和歌山駅へ。朝 JR 和歌山駅のバス停の広場に太田黒田遺跡の案内板が立っていましたが、弥生時代からその後古代にかけて、紀ノ川河口に開けた集落の複合遺跡。

紀ノ川の河口を本拠として、初期大和王権の中核にあって、大陸・朝鮮半島への外交・軍事を担った紀氏。紀氏についてはあまり知りませんでしたが、岩橋千塚古墳群のスケールから、中央の豪族に劣らぬ勢力を持っていたのだろう。また 伊勢神宮と同格という日前宮の存在も面白い。

和歌山と言うと 直ぐに 「熊野古道・熊野から大和へ」と言ってしまうのですが、紀ノ川沿いの「紀路」の存在は非常に興味深く、認識を新たにしました。

午後は 和歌山ラーメンを久しぶりに食べて、JR 和歌山線に乗って 五条へ 紀ノ川を遡ります。



弥生時代から続く紀ノ川河口の集落

JR 和歌山駅前の太田黒田遺跡



風土記の丘の下 平野部中央を東西に流れ下る紀ノ川 2007.7.31、

2.2. 紀ノ川の中流 古代大和の玄関口「五条」

午後1時50分和歌山発の王寺行に乗る。紀ノ川に沿って 約1時間半で五条である。

1週間前に龍門山に登るため、粉河まで行き、さらに午後橋本まで乗っているの、今日は 五条から橋本までの間でもやっぱり紀ノ川は中央構造線沿いの幅の広い河岸段丘の中央を悠然と流れ下ってくるのかを確かめ、五条が大和への入口として機能できる川岸があるのだろうか・・・それを確認したい。

五条・橋本・九度山といえば 忍者の世界 山奥の奥と思っていましたが、龍門山に登って、吉野から流れ下ってくる紀ノ川を見ていると山奥の谷間を流れ下ってくるとのイメージは すでに吹き飛んでいる。

和歌山を出て、電車が大きく東へカーブを切ると田園の向うに朝歩いた風土記の丘の丘陵地が遠く見え、遠く龍門山を遠望しながら紀ノ川の鉄橋をわたると北側は泉山脈から岩湧山・金剛山の



紀伊風土記の丘遠と紀ノ川鉄橋からみた龍門山 遠望 2007. 7. 31.

山並み 南側には龍門山・九度山・高野山から吉野へと山並みが続く幅の広い谷筋を紀ノ川に平行して、和泉山脈の山裾を東へ進み、龍門山がぐんぐん近づいてきて、堂々とした龍門山の山体が車窓の南正面に見えると粉河である。

粉河を出ると電車の走る高台の下にゆったりと流れる紀ノ川が見える。この谷筋は東から西へ傾斜し、紀ノ川の流れと同様東へはどんどん登っているのかもしれませんが、やっぱり山を登っているとの感じではない。ここが日本の大地溝帯中央構造線の中ということが頭にインプットされていると 幅の広い溝の中をゆっくりと遡っているとの感じが実感される。



粉河周辺からの龍門山



粉河から橋本・五条間の紀ノ川中流



何度か 紀ノ川が眺められたり、離れたりしながら和泉山脈の山裾をはして、約1時間半。両側の山裾が遠のき、広い盆地上の街中が見えてくると五条である。



車窓より、五条の盆地 写真中央の木々の帯が悠然と流れる紀ノ川

やっぱり 深山の真っ只中の感じはない。 紀ノ川は広い五条の盆地の真ん中の平地を川幅を広げ、ゆったりと流れ下る。古代も今も和歌山から大和へ抜ける交通の要衝で、紀ノ川はこの五条で 吉野川と名前を変えて、東へ曲がりながら吉野の山中へ入ってゆく。

一方 紀路は五条から北側へ曲がって、ちょうど金剛山の東山麓と巨勢山の西の谷間を遡り、大和と紀ノ川水系を別ける

分水嶺 風の森峠を越えて 葛城・大和へと入ってゆく。

古代の「五条」はそんな紀ノ川筋の大和の外港であった。五条駅で下車して、地図を拡げて まず、紀ノ川の流れを見に行く。JR 五条駅や市街地は金剛山の南山麓の丘陵地に広がっているの、紀ノ川はずっと南側である。

駅の正面を出て、国道24号線を渡って 真直ぐ南へ紀ノ川の土手に向かい、JR 五条駅から15分ほどで、紀ノ川の堤防に出る。川幅の広い大きな川が盆地の平地を北東から南西へゆったりと流れている。

ちょうどこのあたりが、五条の港だったのだろう。川の反対側 五条の街の背後には大きな金剛山がどっしりと座っているのが見える。



ゆったりと五条を流れる紀ノ川 五条駅から南へ 紀ノ川の川岸へ向かう 五条の街の北側にそびえる金剛山

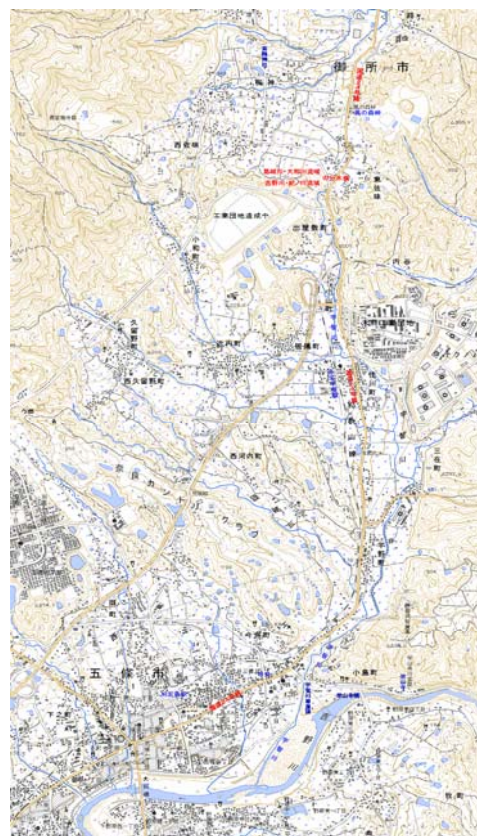
○ 古代大和「紀路」 大和の外港 紀ノ川「五条」周辺



紀ノ川五条 下流側 2007. 7. 31.



紀ノ川五条 上流側 2007. 7. 31.



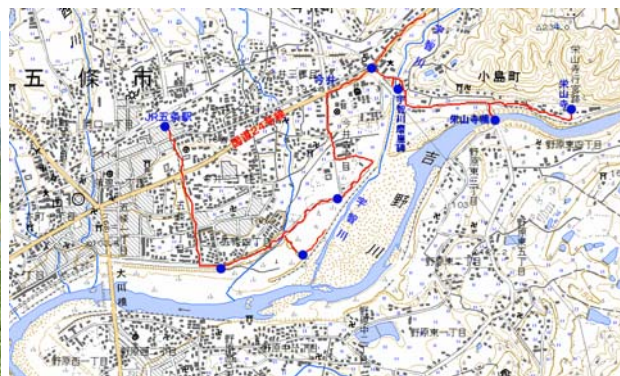
紀ノ川の土手に座って 地図を拡げて、紀ノ川の流れと周囲の景色を対比させる。下流側は大きく開けていて、遠く龍門山・高野山の山並みと和泉山脈の広い空間が開け、その間をゆったりとした流れが下って行く。流れの障害もなく、河口までゆったりと下って行けそうである。

一方、上流側に目をむけると、正面左手に緑の雑木に包まれた広い中洲があり、川の流れは中洲の向うになって良く見えないが、中洲のその向うに吉野の山々の端に当たる丘陵地が東から延びていて、吉野川と名前を変えた紀ノ川はこの丘陵地にぶち当たって、流れを東に変えて 吉野の山の中へ消えてゆく。吉野川の東への方向転換点にかかる赤いアーチ型の橋が中洲の向うに見える。中洲の北側背後は 金剛山と吉東に連なる吉野連山との鞍部になっていて 五条から見ると 上部に拾い空間が開けたはなだらかな丘陵地である。この低い丘陵地が紀ノ川水系と大和の葛城川・大和川水系との分水嶺で、大和へ行くには五条から陸路この分水嶺を越えて大和へ入る。

古代の「紀路」も現在の国道24号線 JR和歌山線すべて同じである。もっとも 古い古墳時代からの紀路・葛城道や国道24号線は金剛山のゆるい傾斜地の高台の上を真直ぐに分水嶺である風の森峠を越えて葛城・大和へ入るのに対し、奈良

時代の紀路は、もう一つのルート巨勢道と呼ばれる宇智から巨勢山の東の谷間を越えてゆく道が開かれ、現在の JR もこのルート抜けて 大和へ入っていく。

この分水嶺から真直ぐ南へ 吉野連山の山裾の崖下を縫って



宇智川が流れくんだり、吉野川に合流している。 この宇智川と吉野川の合流点にあるのが、前に見えている緑の広い中洲で、この中洲の手前に川幅の狭い整備つれた宇智川が流れ込んでいるのが見える。おそらく古代には この中洲を含め、広い河原が形成されていて、五条の港がここに形成されていたと思われる。

古代大和「紀路」 大和の外港 紀ノ川「五条」周辺 2007.7.31.

和歌山から紀ノ川を遡ってきた「紀路」はここで 紀ノ川を離れ、金剛山東山麓を北へ大和へと向かう



紀ノ川五条 下 2007. 7. 31.



紀ノ川五条 上流側 2007. 7. 31.



五条市今井周辺 国道 24 号線
葛城・大和への坂道を登る



五条市今井から東へ分岐
吉野への道
吉野川にかかる栄山寺橋

この紀ノ川(吉野川)の土手からは広い中洲に阻まれて、東の吉野の山中へながれを変えてゆくあたりが良く見えない。

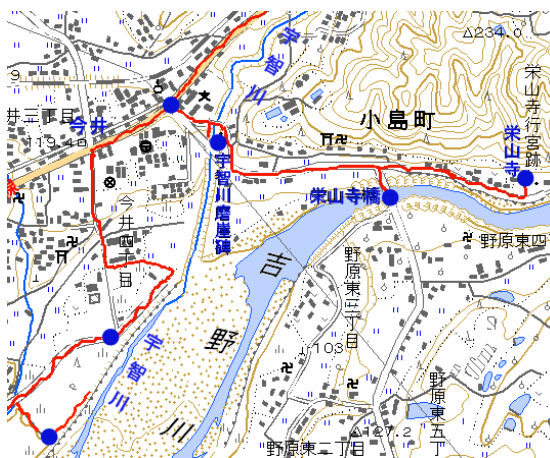
土手の上を北に歩いてゆくと、宇智川の改修工事中で北へ行く橋がなく、そのまま土手沿いに赤いアーチ橋の方へは行けず。

宇智川の手前へ引き返し、土手を降りて集落を抜けて国道 24 号線「今井」の集落にでる。「今井」



は五条の街の東の端で、金剛山の広い斜面の高台の上にあり、国道は北よりに方向を変えながら、さらに大和・御所方面へ坂道を分水嶺へ登ってゆくが、ここで東に分岐して、宇智川をトラバースして、崖下を流れる吉野川に沿って吉野へ向かう道がある。

吉野の山中から流れ下ってきた吉野川が五条の盆地に入り、金剛山東山麓の広い傾斜地にぶつかって、山裾に沿って方向を南に変えながら、盆地の中を西へ流れ下って行く。



五条市今井を北へ走る国道 24 号線

大和・吉野の分岐 今井周辺の地図

北東に見える赤いアーチ橋のあたりが、その吉野川の方角変更点。この橋より北は両側が切り立った崖となったその中を吉野川が悠々と流れ下ってくる。また、今井の分岐の直ぐ横を流れる宇智川も幅の狭い切り立った崖の中を流れ下ってくる。

金剛山の山裾の傾斜地とはいえ、こんな街の平地の中に深い溝状の溪谷があるのか??とビックリしました。

吉野川といい、宇智川といい、川の大きさが異なるが、山裾の傾斜地の地割れした溝の中を流れ下って、五条の盆地に出てきたという感じである。日本の大地溝帯 中央構造線の川の名残であろう。

今井から直ぐ宇智川を渡る橋であるが、その下の崖に古い磨崖碑があるというので、崖を川底に降りる。本当に狭い崖である。また、今井で見るとそれほどきつく感じませんでした。流れ下る宇智川は傾斜がきついのだろう。



磨崖碑の崖 狭い溪谷を流れる宇智川 字が書いてあるのですが、ほとんど読めない

再度崖からもとの道に戻って、吉野へ行く道を赤いアーチ橋（栄山寺橋）の方へ向かう。

先ほどの溪谷は山裾の広い高台の中に隠されてみえない。また、西には高台の下をゆったりと流れる吉野川が見える。

赤いアーチ橋・栄山橋の上から上流側と下流側をみるが、どちらも満面と水をたたえた紀ノ川がどこまでも悠然と流れている。「紀路」和歌山から遡ってきた五条は大和への玄関口として素晴らしい外港であつたろう。



吉野への道から眺める吉野川 左:栄山橋 右:下流側遠望 2007. 7. 31.



栄山橋より上流側



栄山橋より下流側



吉野川の傍らの高台にある古寺 栄山寺 2007. 7. 31.

淀川水系 大和川水系と比べて 山深い道を分け入るなんて と思っていましたが、いままで、五条や紀ノ川水系に擁っていたイメージは完全に覆った walk。

ゆっくりと吉野川の眺めを見ながら すぐ傍の古寺 栄山寺の境内を歩きながら、紀ノ川水系の walk の一日を思い浮かべていました。



南 吉野川 五条方向の遠望

北の葛城・宇智方向の遠望

夕暮れ 栄山橋橋から今井へ戻る道で 2007.7.31.

2.3. 五条から陸路 金剛山の東麓 風の森峠を越えて 葛紀・大和へ

風の森峠周辺は 一番古い氏族「鴨氏」の本拠地

国道24号線の「今井」からバスで北へ分水嶺の風の森峠を越える。いよいよ、紀ノ川から離れて 陸路で大和へ入る。もう 時間は午後5時をまわって、日没に近い。

この今井から分水嶺の風の森峠のほぼ中間点にある JR 北宇智駅は本年3月解消されるまで、スイッチバックがあった駅。

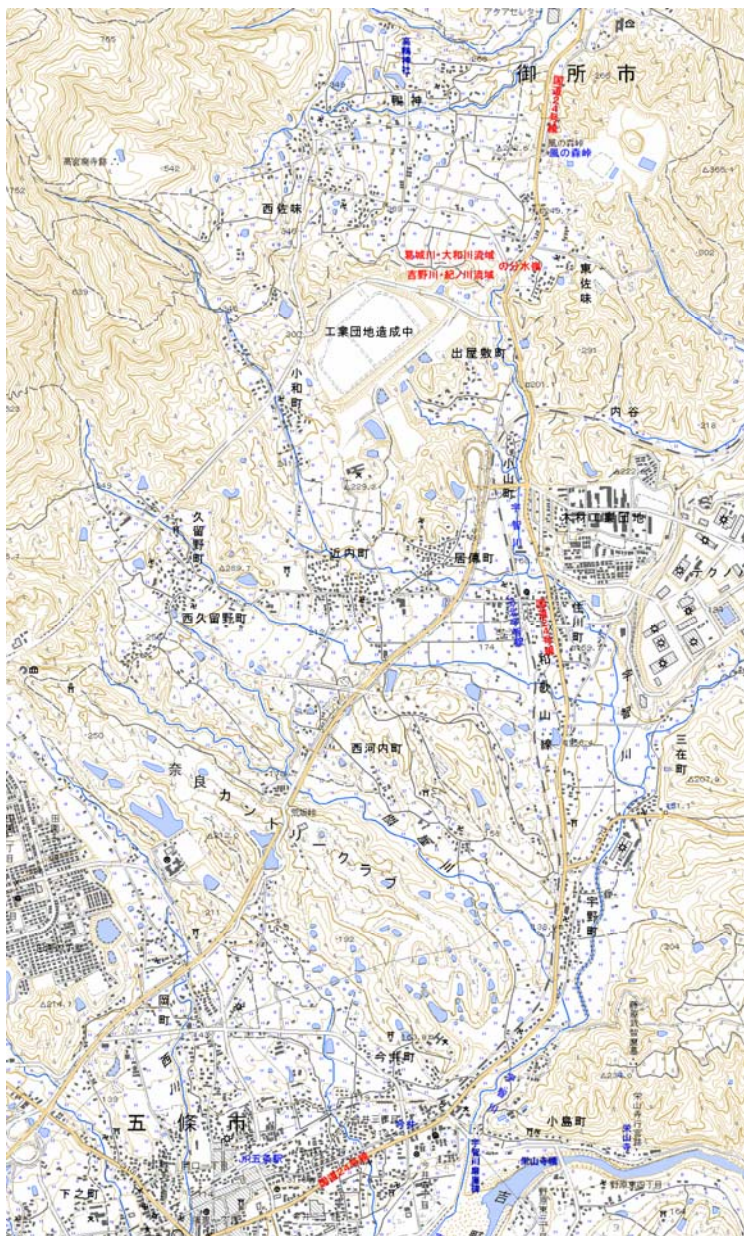
JRは五条から紀ノ川沿いをはなれ、金剛山と吉野山地の間の谷斜面を登って、北宇智の駅にはいり、この駅からさらに登ったところで90度方向を変え、東へ 巨勢山の東側 巨勢道は大和に入る。一方古い「紀路」・葛城道や国道24号線はそのまま真直ぐ風の森峠を越えてゆく。

地図をみても五条周辺から見あげる分水嶺の金剛山東山麓は田園が広がる緩やかな斜面の高台で難所はないと思えるのですが、高台に突如現れた宇智川の溪谷 そして スイッチバックがある。

思いもかけない難所があるのだろうか・・・・・・と。

やってきた大和高田行のバスの一番前に座って、国道24号線の坂道を登ってゆく。
スイッチバックの駅も見たいのですが、日没近く今日はとにかく風の森峠へ。

今井から北宇智駅のある住川町の辺りまでは道の両側に町並みのある街道筋で、家並みの間からは田園や新しい住宅地そして、新しい道路などが入り混じって見える中をまっすぐに緩やかな傾斜地を登って、まもなく、住川町。 街道筋に家並み続き、駅の方は見えないが、特に変わったところもなし。



上今井から住川町(JR北打宇智駅周辺)間の国土24号線で 2007.7.31.

この住川町を過ぎると左手には金剛山の大きな山体が見え、坂は少し急になりって登ってゆくと、山間の緩やかなスロープにはよく整備された段々畑が広がっている。上ってきた南側を見るが、田畑のスロープの下側になっていて、紀ノ川の川沿いは見えない。緩やかな斜面とはいいながら、随分登ってきた。



金剛山の東山麓を北の風の森峠へ向かう



振り返ると傾斜地に田園が続いている

山間が近くなり、下に 吉野山地の崖が見え隠れするようになり、知らぬ間に分水嶺を越えて 佐見の新しい町の十字路口に出るともう 御所市である。直ぐにまた、田園地が広がる登りとなって、両側の森の中 まっすぐに登ってゆく坂道が伸び、向うが見えない峠がみえてくる。 ここが 風の森峠。五条今井から約20分ほどで夕闇迫る風の森峠に立つ。紀路を遡っての大和入りである。この峠を越えると御所市の市街地 葛城である。また、紀ノ川側を眺めると 金剛山の東山麓のなだらかなスロープに 整備された段々畑が続く田園地帯がひろがっている。



風の森峠 2007. 7. 31.



風の森峠から 南 金剛山東山麓に広がる夕闇の田園地帯 2007. 7. 31. 夕

バスではあったが、特に急峻な登りもなく、五条からこの峠までたどれる。古代の「紀路」そのままでないにしろ、安全にかつ、短時間で五条からこの葛城・大和へ入れたと思う。

この峠から東野金剛山東山麓の鴨神周辺は古代の一番古い氏族「鴨氏」の本拠地で、また この鴨神に続く金剛山・葛城山東山麓は葛城氏の本拠地である。

これらの氏族はこの紀路を通じて、西日本諸国や大陸・朝鮮半島と繋がり、初期大和王権を支えた。

やつぱり、古墳時代 卑弥呼の時代 そして初期大和王権の時代の最重要路はこの紀路であったかもしれない。

紀ノ川河口の紀氏 そして 川を遡る大和の玄関口 葛城の鴨氏・葛城氏の存在がそれを示しているように思う。

○ 風の森峠の東 金剛山の東山麓の広い傾斜地は鴨族の本拠地



神武・綏靖・安寧の三代に皇后を送った鴨氏。
金剛山の東山麓に本拠を構え、神武天皇を熊野から大和への道を八咫鳥（やたがらす）となって案内し、その後 葛城川のほとりの平野部に居を移し、初期王朝を支えましたが、景行期に大和を追われ9代で滅亡。鴨一族は京都の山城に移り「鴨川」、「上賀茂」、「下鴨神社」の名を残したと言われている。
鴨氏が没落した後、今度は仁徳・履中・雄略に皇后を送った葛城氏が大和政権で勢力を害いましたが、これも雄略期に滅ぼされました。そして、6世紀になると大和への幹線道は巨勢氏の抑えた巨勢道へと移る。
その後 葛城氏は同氏の流れを汲む蘇我氏に吸収され、紀路に変わって 大和への幹線道となった大和川の竹内街道周辺を押さえた蘇我氏が交易の支配権を握り、勢力を拡大してゆく。



風の森峠周辺から南側五条側に緩やかなスロープで広がる金剛山東山麓の田園地帯

風の森峠から金剛山の東山麓の段々畑の広がる斜面地を金剛山の山裾へ向かって、15分ほど登った静かな緑に包まれた山裾の高台に鴨神の集落がありました。もう金剛山の後に日が落ち、その残光がこちら側に差込、刻々変化する夕闇の夕景が素晴らしい。

金剛山の後に葛城山も顔を出し、大和の中にいることがわかる。

鴨神の集落を抜けた金剛山の山裾森に鮮やかな朱色の鳥居を前に高鴨神社がありました。

もう薄暗くなり始めた境内は本当に静か。京都の上賀茂神社・下鴨神社が鴨氏の本拠と思ってきましたが、鴨氏が山城に入る前にこの葛城の地に本拠をかまえ、ここから、日本各地に散っていったという。朱色の鳥居や社殿が懐かしい。



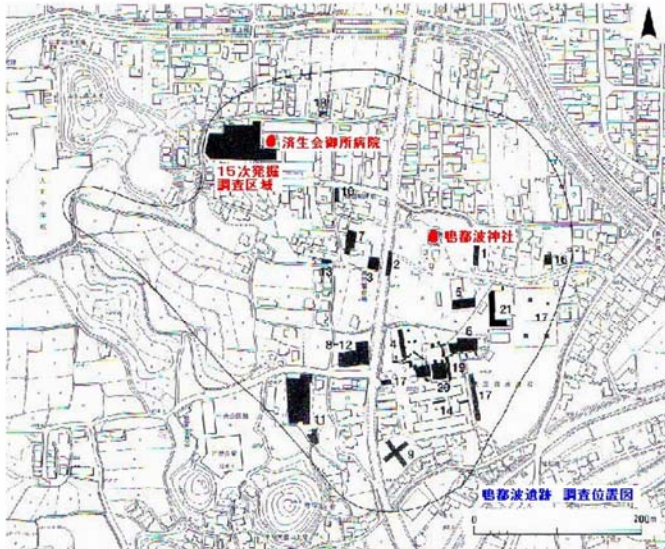
夕闇の 鴨氏の本拠地 鴨神の集落

2007. 7. 31.



鴨氏の本拠地 高鴨神社

参考1. 風の森峠周辺 鴨神にいた鴨氏が 4世紀後半 葛城の中心地におりてきていた



鴨都波神社の傍を流れる葛城川



鴨族の古社 鴨都波神社



4世紀後半 鴨都波1号墳から出土した三角縁神獣鏡

御所市三室 鴨都波遺跡

鴨族・葛城氏との関係が考えられる 弥生時代から古墳時代にかけての南葛城最大の拠点集落

参考2. 本年3月まで JR 北宇智駅にあったスイッチバック 後日訪れました

JR 和歌山線 五条市北打宇智駅 関西唯一のスイッチトバック駅が紀伊から大和平野への入口にありました



スイッチバック当時の駅周辺



2007年(平成19年)3月18日スイッチバック解消 スイッチバック解消後の駅周辺 2007.8.27.
北宇智駅周辺は金剛山の東山麓斜面の傾斜地でかつ駅のすぐ北が分水嶺であり、五条川から来る汽車は 東に傾斜した斜面を斜めに登ってゆき、駅の北側で90度曲がりながら登って東の吉野口へ下って行く。このため、駅をそのまま作ると斜め勾配のまま作らねばならず、かつての汽車や貨物では登りきれず、 スイッチバックで南へ同じ等高線上の駅への線路に入れて北宇智駅に入る。そして、平坦部からスタートしてまた、坂を上る構造になっている。馬力の上った電車では必要なくなっており、ストレートの構造に換えられた。 見たところ この北宇智周辺が特に急勾配の厳しい場所というほど出なかった。

3. まとめ 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました



静かな高鴨神社から、風の森峠まで、戻ったときには もうすっかり夕暮れ。

夏の暑い一日 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました。
紀ノ川流域はよく知らなかったとつくづく感じる一日。

夕闇金剛山東山麓に広がる段々畑や五条を悠々と流れる吉野川の流れも印象的でした。

また、朝 紀伊風土記の丘の丘をたどった紀氏の足跡 岩橋古墳群 結晶片岩を積み上げた良く整備された古墳の美しさとともに古墳の数の多さにもビックリ。

日本で製鉄が始まる前の3世紀後半から6世紀にかけて、朝鮮半島の鉄の覇権を巡って、日本各地の諸国が連合し、その確保に向かい、その絆の中から、邪馬台国・初期大和王権が生まれたという。そんな大和と西日本・朝鮮半島・大陸を結ぶ鉄の道があった。今日訪ねた紀路はそんな古代大和の鉄の道の最重要路。そんな鉄の道で活躍した紀氏や葛城氏そして鴨氏の足跡に触れられた一日でした。



風土記の丘の下 平野部を東西に流れ下る紀ノ川 2007.7.31、

風の森峠をこえともうそこは 葛城 葛城氏の本拠地。 金剛・葛城の山の傾斜地には 渡来の技術集団を含め、葛城氏の鉄の生産工房が点々と建ち並び、それらを見下ろす極楽寺の丘には葛城氏の王城がそれら本拠地や 日本諸国・そして朝鮮半島・大陸に通ずるこの「鉄の道」を見下ろしていた。

日本統一がその後なり、また 渡来の人たちも含め、幾多の技術集団が往来し、次の6世紀には日本で製鉄が始まる。その製鉄の技術をもたらした道もこの鉄の道だったろうと。

2回に渡って歩いた紀ノ川流域 walk 製鉄遺跡には行き当たりませんでした、古代の鉄のいろいろなものが見えてきて楽しい旅でした。



金剛山東山麓 葛城氏の鍛冶生産工房群 南郷遺跡分布図

また 日本の大地溝地帯 中央構造線の溝の中を流れる紀ノ川。

本当に地形的にも 地図やインターネットの地形写真図と首っ引きでそちらも本当に面白いところでした。

淀川・木津川水系 大和川水系 そして紀ノ川水系と古代大和へ入る鉄の道を訪ね これで終わりにしようと思っていたが、何度か 出かけながら、見つけることが出来なかった葛城氏の専用鍛冶工房群 金剛山東山麓に点在する南郷遺跡の遺跡分布図を教えてもらったので、今は完全に整備された段々畑の下ですが、生産工房遺跡を巡って、再度 古代の鉄を考えてみようと思っています。



「紀路」大和への玄関口 紀ノ川の中流五条を悠々と流れる紀ノ川（吉野川）



「紀路」大和への玄関口 五条 2007.7.31、



風の森峠から 南 金剛山東山麓に広がる夕閑の田園地帯 2007.7.31、